

## 【絵画】

### 1. 紙本墨画胎蔵旧図様 (智証大師本)

一巻

建久四年禅覚書写の奥書あり

区分：重要文化財（昭和9年1月30日指定）

種別：図像

法量：縦29.5cm 長1684.0cm

時代：鎌倉時代 建久4年（1193）

「胎蔵旧図様」の原本（現存せず）は円珍が中国越州開元寺に滞在していた唐・大中八年（854）に書写した胎蔵曼荼羅の図像で、一巻に外金剛部院までの二百余りの図像を原則二段に分けて描く。永久二年（1114）三井寺経蔵の円珍請来本を鳥羽僧正覚猷が絵仏師応源に模写させ、これを治承五年（1181）に三井寺別当真円が書写し、さらにこの「大寶院御本」を建久四年に禅覚が書写した第三転写本が本作である。内容は空海将来の『大日経』による体系的な現図曼荼羅の図像とは異なる点が多く、むしろ中国で整理される以前の状況を伝える一本として密教学上きわめて重要なもの。円珍将来の原本が現存せず、本作が最古写本となることから資料的価値は特に高い。



巻頭

## 【工芸品】

### 1. 太刀たち〈銘めい正恒まつねノ〉 一口

区分：重要文化財（昭和14年5月27日指定）

種別：刀剣

法量：刃長71.8cm 反り2.9cm

時代：平安時代 12世紀

鑄造，小鋒で，腰反りが高く踏ん張りがついた健全な体配を示す作品である。小乱れを混じえた広直刃に乱れ映りが淡くたち，古調な刃文を焼く古典的な太刀姿に古備前の優美な作風が漂っている。本作は，平安時代末期のいわゆる古備前正恒の作とされる。

越前丸岡藩有馬家伝来と伝え，家紋散糸巻太刀拵が附属する。



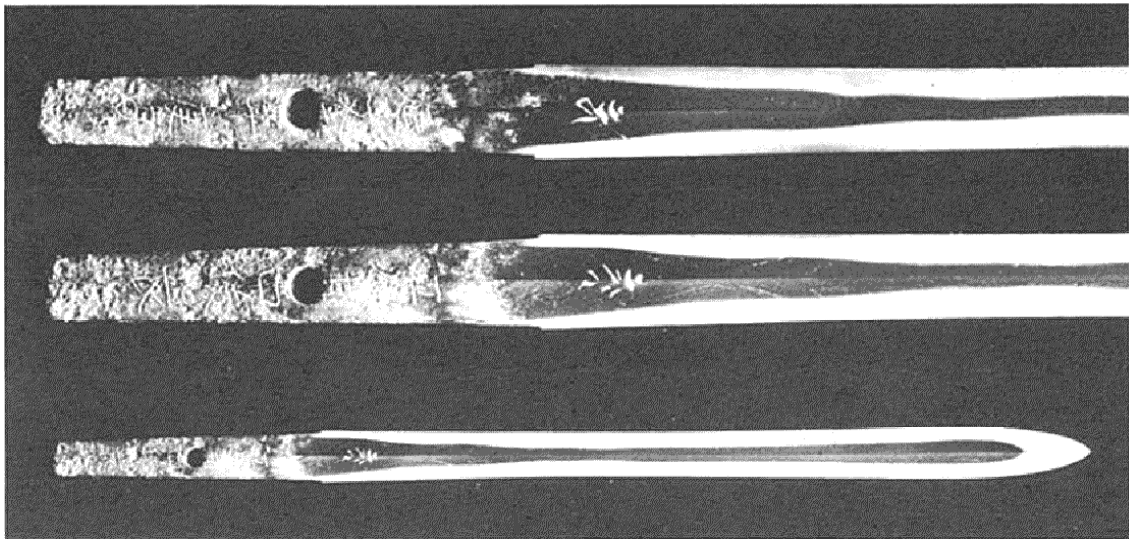
2. 剣 <sup>つるぎ</sup> 〈<sup>めいごうしゆうかん</sup>銘江州<sup>ろとしなが</sup>甘呂俊長<sup>えんぶんごねんかのえね</sup>／延文五年庚子〉 一口

区分：重要文化財（昭和53年6月15日指定）

法量：全長26.3cm

時代：南北朝時代（延文五年＝1360）

俊長は、近江国の刀工で、相州系の高木貞宗の弟子とされる。しかし、本作は、地肌に柂目が強く、刃文に砂流し、掃きかけがあつて、大和伝の作風がうかがわれる。刀工、年紀銘がある、南北朝時代の数少ない剣の作例として貴重であるとともに、作風を含め、総合的にさらなる研究がまたれる重要な資料である。



3. かたな 刀 めいなんきにてしげくにこれをつくる 〈銘於南紀重国造之〉 一口

区分：重要文化財（昭和34年12月18日指定）

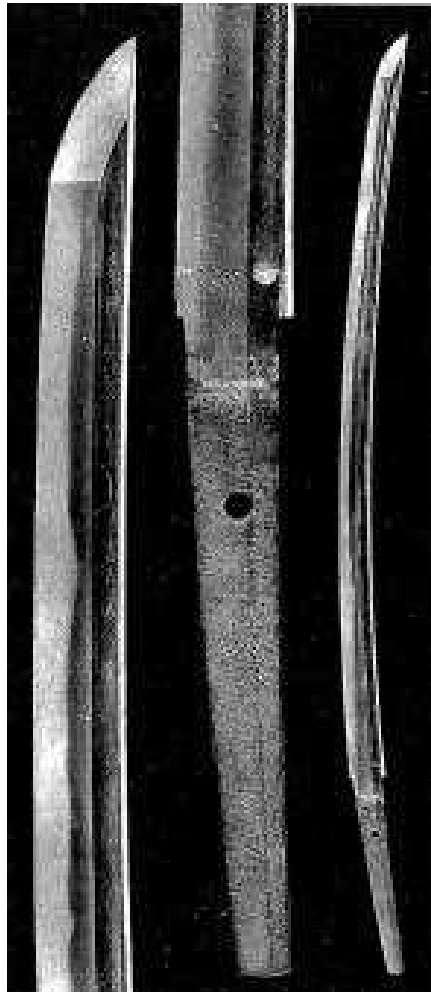
種別：刀剣

法量：刃長73.0cm 反り2.4cm

時代：江戸時代 17世紀

鎬造，中鋒がやや延びた豪壮な姿である。反りは浅く，いわゆる桃山時代からはじまる新刀の典型的な遺例である。小板目肌がよくつんで，地沸厚く，刃文は浅く湾れて小互の目が混じる。足，砂流，金筋がかかり，匂口が明るく冴える。

本作は，紀州和歌山藩工，重国の得意とする豪壮華麗な作風を湛えた傑作として評価が高い。紀州徳川家より元治元年（1864）大坂城において，徳川将軍家に献じられ，伝来したものである。



4. たんとう めいよしみつ はかたとうしろう 短刀〈銘吉光（博多藤四郎）ノ〉 一口

区分：重要文化財（昭和6年12月14日）

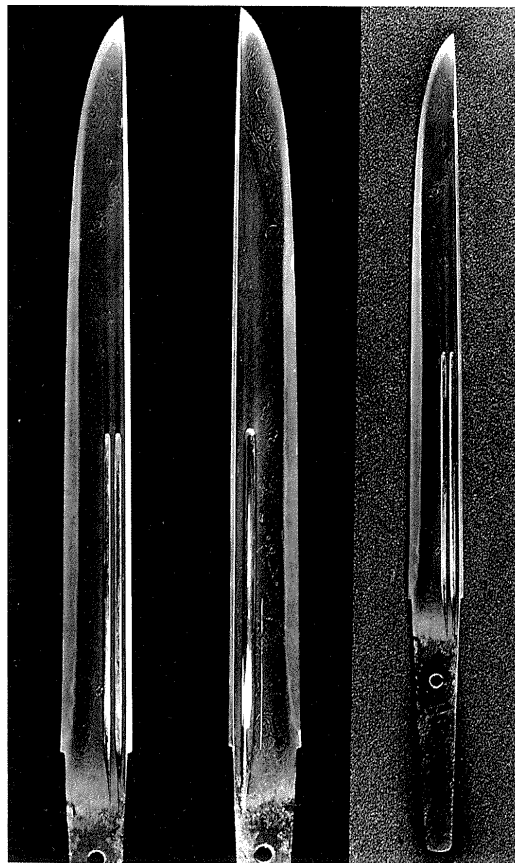
種別：刀剣

法量：刃長24.6cm 反り なし

時代：鎌倉時代 13世紀

平造，筧反りの短刀で，「吉光」の二字銘を切る。山城国粟田口派の名工の一人，藤四郎吉光の代表作の一口。鍛えは小杢目に地沸えがついて，大肌が混じり，直刃調の刃文を焼く。ふくらはやや枯れる。茎は生ぶで，総体にすこぶる健全である。表に護摩箸，裏に棒樋を搔く。

もとは筑前福岡藩主黒田忠之所持で，後に豊前小倉城主小笠原忠真に贈られた。



5. どうきょう 銅鏡 あきくさまつくいづるもん 〈(秋草松喰鶴文) 〉

一面

区分：重要文化財（昭和11年5月6日指定）

種別：鑑鏡類

法量：径24.8cm

時代：鎌倉時代 12世紀

本件は、銅製鑄造の円鏡である。背面には、萩・薄・女郎花・菊等の秋草が叢生する様を上下に斜めにずらして配置し、この構図をとることによって遠近感を出している。また、その草間に配される番いの鶴は、一羽は松を啣えて飛翔し、一羽は水辺に戯れるなど、これらの叙情的な図様は、優美な和様の意匠が完成した平安から鎌倉時代における和鏡の典型を示している。鑄上がりも良好な優品である。



## 【書跡・典籍】

### 1. 医学書（<sup>いがくしよ</sup> <sup>すうらんかんほん</sup>崇蘭館本）

23件（56冊）

区分：未指定文化財

種別：書跡・典籍

時代：宋時代～明時代

典医であった京都の福井家に伝来した医学書のまとまりで、「崇蘭館本」として夙に知られている史料群である。

本史料群は、わが国にのみ伝存している南宋本をはじめとする、稀覯本も含まれており、元・明版を中心とする中国版本からなる。

わが国における医学書受容のあり方、漢方・本草学などの東洋医学史、出版・印刷史、交流史などを研究する上で、まとまって伝来した数少ない医学書の史料群として極めて重要であり、国内外において高く評価されている。



しほんぼくしよげんじものがたり みゆきのまきざんかん  
2. 紙本墨書源氏物語行幸卷残卷

一帖

区分：重要美術品（昭和10年10月4日認定）

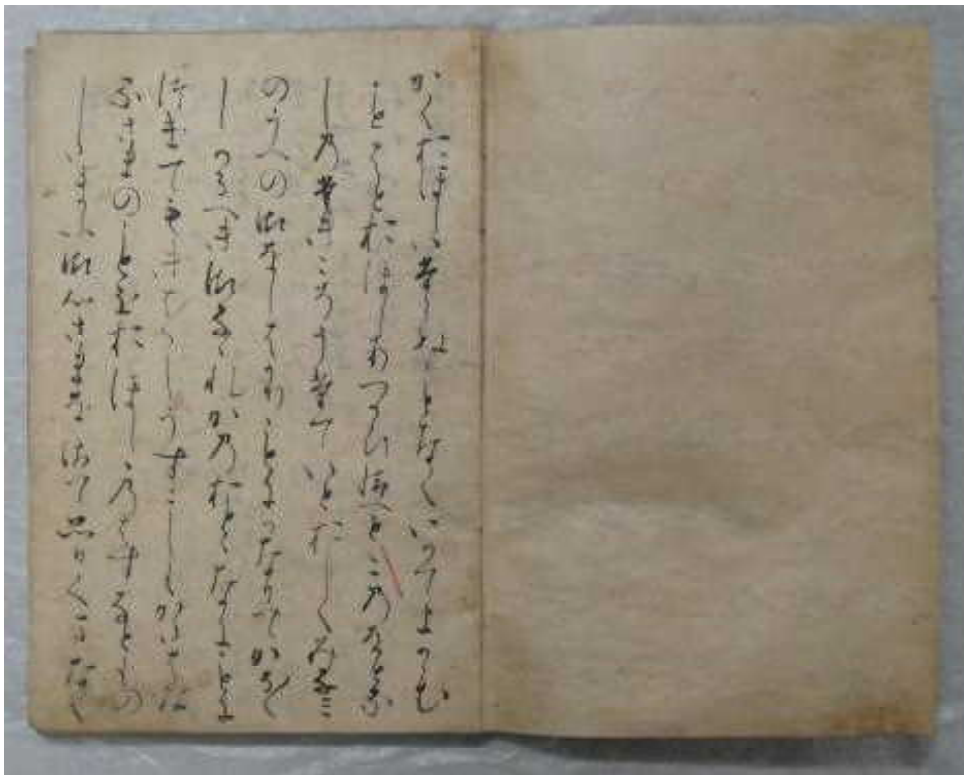
種別：書跡・典籍

法量：縦22.0cm 横14.1cm

時代：鎌倉時代

行幸卷は『源氏物語』の内の1帖で、本帖は『源氏物語』諸本中、所謂青表紙本と称するものの原本である。青表紙本とは、藤原定家が書写したもので、『明月記』元仁2年（1225）2月16日条にその記事がみえる。

青表紙本の既指定品として「花散里」「柏木」「早蕨」の3帖があるものの、本帖には、注釈である奥入が卷末にあり、青表紙本の原姿を伝える唯一のものとして貴重である。加賀・前田家伝来になり、五十嵐道甫作の蒔絵箱に納められている。





3. 唐柳先生文集 (宋版)

二冊

区分：未指定文化財

種別：書跡・典籍

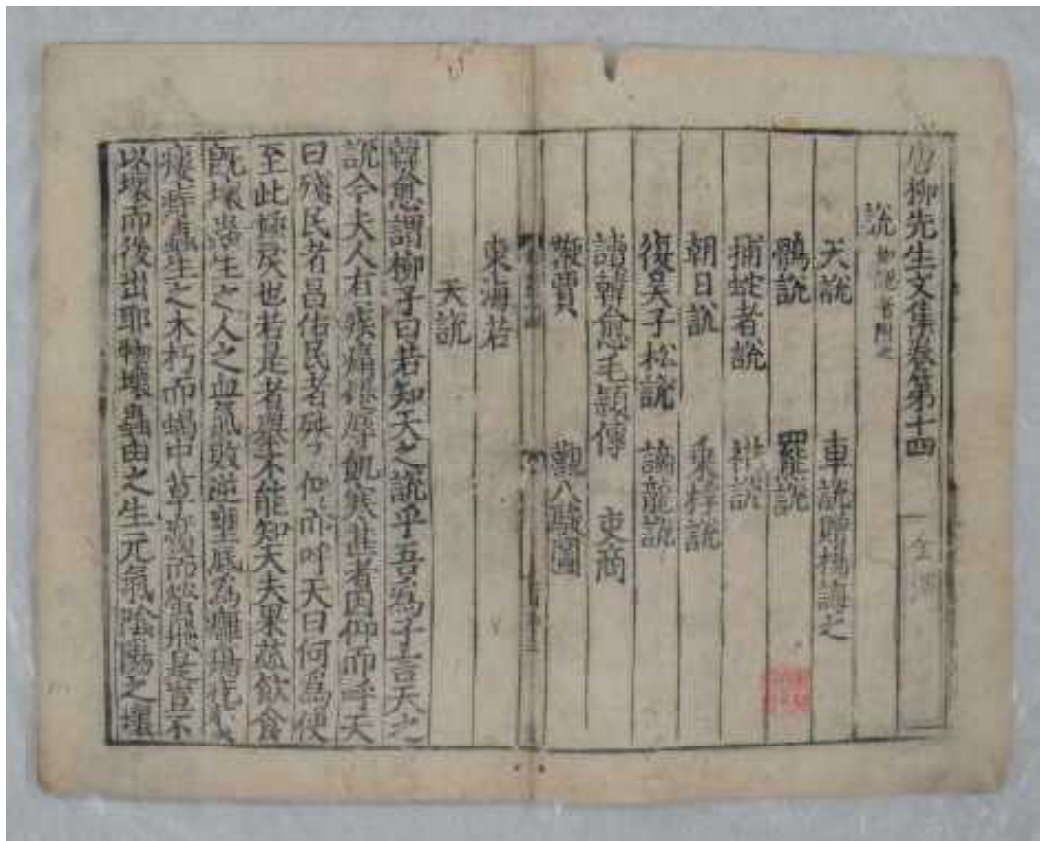
法量：縦26.5cm 横17.5cm

時代：南宋時代

『唐柳先生文集』は、唐の文人・政治家であった柳宗元（773～819）の文集である。彼の詩はおよそ左遷以降の作で、不遇を紛らわすため山水をめぐって詩文を作り、自然詩人としての名を高めた。

元は金沢文庫に伝来した本冊は、『<sup>けいせきほうこし</sup>経籍訪古志』にみえる賜<sup>しろ</sup>廬文庫蔵本に該当する。明治以降、所在不明であったが、近時確認されたものである。

本冊の特徴は現在通行している45巻本に改編される以前の32巻本の姿を留める貴重なものであり、また『唐柳先生文集』の現存最古本として価値が高いものである。



## 【古文書】

### 1. 紙本墨書建久元年五月十六日廳宣

一幅

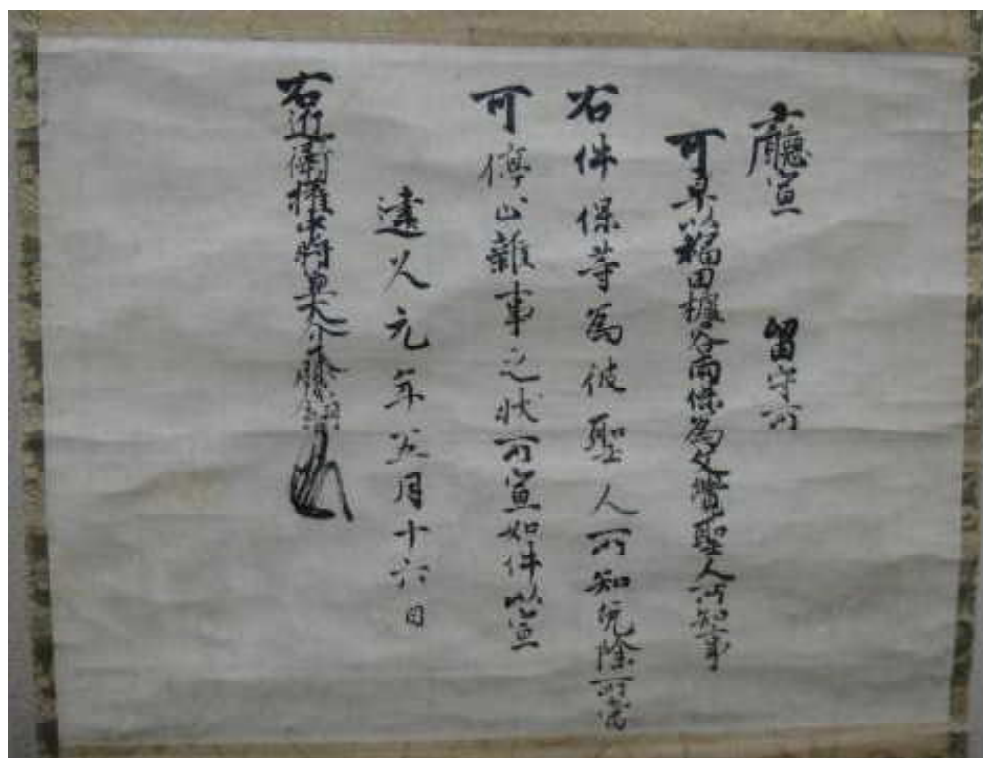
区分：重要美術品（昭和12年8月28日認定）

種別：古文書

時代：鎌倉時代

播磨国司が管国内の福田保と櫛谷保を文覚領として所当の免除と雑事の停止を留守所に命じた建久元年の庁宣である。文覚（1139～1203）は鎌倉時代前期の僧で、源頼朝の平家追討に貢献したと考えられている。平家滅亡後は、後白河院の外護を受けて、空海ゆかりの諸大寺の復興を協力に推進した。

鎌倉時代初期の数少ない国司庁宣として古文書学研究上に貴重なものである。



2. <sup>たいらのきよもりうけがみ</sup>平 清盛請文

一幅

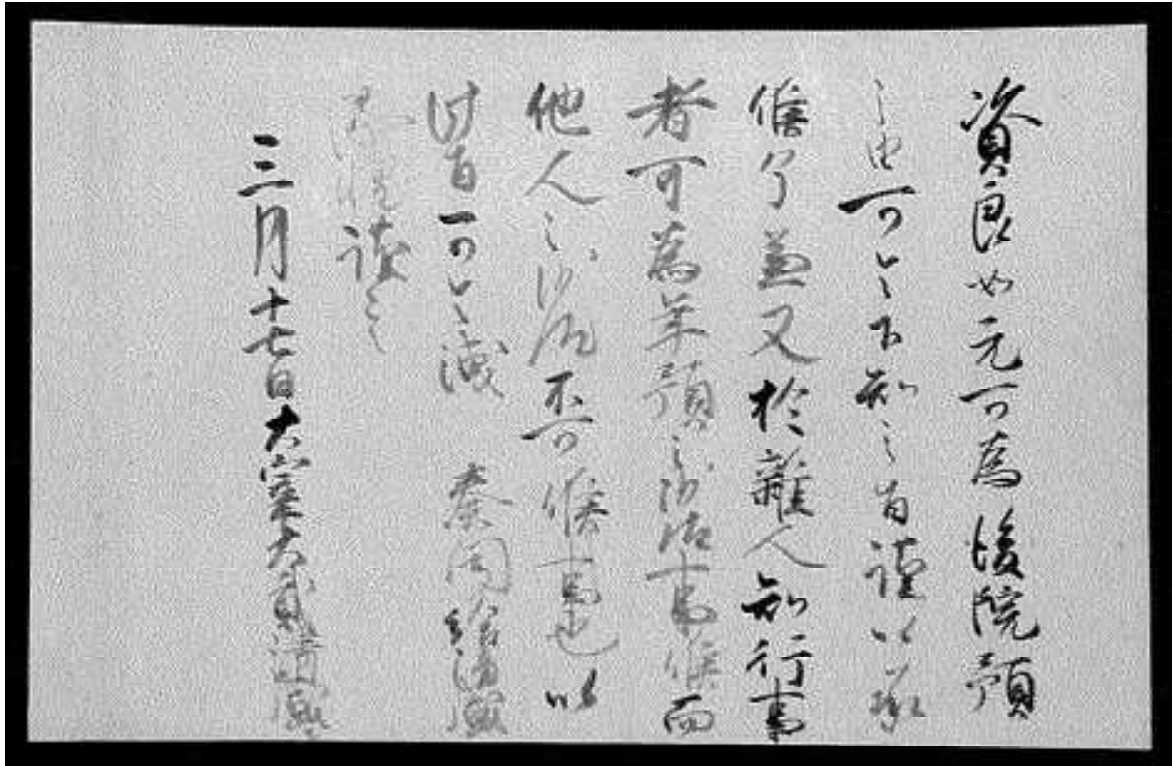
区分：未指定

種別：古文書

法量：縦31.2cm 横48.4cm

時代：平安時代

本文書は年紀は無いが、平清盛（1118～1181）が「大宰大式」を名乗っていることから、清盛42～43歳の時のものである。後白河院から安倍資良を後院の預職に留任させよとの命を奉わったことに対して、拝承の旨を答えたものである。文末には、清盛が自身の名を加えて「恐惶謹言」と書く最も鄭重な書札礼で応えている。自筆の請文であり、古文書学・政治史上に重要な文書である。



## 【工芸技術資料】

### 1. こう ろ ぜんきりたけほうおうきりんもんこくしょうぞくぎれ 黄櫨染桐竹鳳凰麒麟文穀装束裂 一式

作 者：喜多川 俵二（重要無形文化財「有職織物」の保持者）

制作年：平成2年（1990年）

天皇がそくたい束帯の上衣として夏季に着用するほう袍（御束帯黄櫨染御袍）となる織物。桐竹鳳凰麒麟文も黄櫨染色も天皇のほう御袍特有のものである。穀は、紗の組織に、たていと経糸一組又は二組を飛ばし、ぬきいと緯糸を浮かせて織り込む技法を指す。

袍のらん襷（前後の裾に付けた共布）には横裂が用いられるが、その部分の文様は横向きに織り出され、制作に際しては周到な設計が行なわれている。

重要無形文化財「ゆうそくおりもの有職織物」の技術見本として貴重である。

## 2. こめおりきもの うみ き 穀織着物「海に聞く」 一点

作 者：海老ヶ瀬 順子

制作年：平成28年（2016年）

備 考：第63回日本伝統工芸展 文部科学大臣賞 受賞作品

ゆうそくおりもの 有職織物の技法として知られるこめおり 穀織と、かすりおり 絺織の技法を組み合わせ、作者の故郷・富山の海景を表現した作品。

主に臭木くさぎと藍ざくろを用いて青のグラデーションを表し、絺のアクセントになる茶褐色の部分にはたていと 柘榴を用いた。等間隔に染めたしよけん 経糸を手でずらして調節し、ぬきいと 絺模様をあえてねりぎぬ 暈すように表現した。また、経糸には主に生しよけん 絹を、緯糸には撚りの弱いねりぎぬ 練絹を用いることで、穀織の白い粒文様をふっくらさせ、艶を持たせた。

穀織と絺織の高度な技量が発揮された第63回日本伝統工芸展における優秀作品。



### 3. 幾何学模様溜塗 漆皮箱 一点

作者：増村 紀一郎（重要無形文化財「髹漆」の保持者）

制作年：平成28年（2016年）

法量：縦16.5cm 横25.5cm 高8.5cm

備考：工芸技術記録映画対象作品

獣皮を素地とし漆を塗って仕上げた、いわゆる漆皮の技法による六角形の箱。一晚水に浸した牛皮を木型に被せ、皮の端に開けた穴に紐を通して茶巾を絞るように木型に沿わせていく。この素地に、漆で麻布と美栖紙を貼り、反りやすい口縁には竹ひごの覆輪を巡らせ補強している。

側面の中塗りには本朱・ベンガラ・松煙墨を混ぜた落ち着いた朱色の漆を、蓋表の中塗りには黒漆、赤口を混ぜた朱漆、本朱を混ぜた朱漆を幾何学模様塗りに塗り分けて境を塗り暈し、透漆で上塗りして総体を呂色仕上げの溜塗としている。

平成27年度工芸技術記録映画「髹漆－増村紀一郎のわざ－」の対象作品。



#### 4. きりばめぞうがんはぎあわ はこ けいきょう 一点 切嵌象嵌接合せ箱「溪響」

作 者：山本 晃（重要無形文化財「彫金」の保持者）

制作年：平成28年（2016年）

法 量：縦20.7cm、横13.5cm、高21.0cm

備 考：工芸技術記録映画対象作品

野鳥・カワセミの遊ぶ秋の溪流の風景を、きりばめぞうがんはぎあわの技法によって、箱の蓋および底面に描き出した作品。

この作品には、純白に発色する銀、様々な灰色の階調をなす四分一、深みのある黒に発色する赤銅等、10種類の金属が用いられている。これらの金属を素材とする厚さ1.6ミリの板金を、糸鋸によって切り抜いては銀鑢（銀と銅と亜鉛の合金）で貼り合わせる作業を繰り返し、立体として組み立てた。切嵌象嵌・接合せの高度な技術と、金属の色彩美が現代的な意匠の中に活かされた良品である。

平成28年度工芸技術記録映画「彫金—山本晃のわざ—」の対象作品。



## 5. <sup>たばねあみはなかご</sup> 東編花籃「宝珠」<sup>ほうじゆ</sup> 一点

作 者：藤沼 昇（重要無形文化財「竹工芸」の保持者）

制作年：平成29年（2016年）

法 量：径40.0cm 高24.0cm

備 考：工芸技術記録映画対象作品

<sup>ほうじゆ</sup>宝珠をイメージして真竹のひごを編み上げた花籃。異なる技法で編んだ外編みと内編みからなる二重構造を持ち、外編みには従来の東ね編みにひねりを加えた作者独自の技法が、内編みには透かし網代編み<sup>あじろあ</sup>が用いられている。

外編みのひごは、宝珠がまとう炎をイメージして黒から茶に染められており、その色のゆらめきが、東ね編みの表現する竹の力強さを一層強調している。対して、外編みの間からのぞく網代編みからは竹の繊細さが感じられる。

平成28年工芸技術記録映画「竹工芸—藤沼昇のわざ—」の対象作品





## 【アイヌ文化関係資料】

### 1. アイヌ文化関係民族資料 計 45 点

区分：未指定

時代：19～20 世紀

骨董商などを通じて収集されたコレクションで、木彫や刺繍など工芸的価値の高い資料が多く含まれ、展示・研究からアイヌ文化復興に寄与する資料と考える。木綿衣（北海道アイヌ）は、藍染木綿地に絹裂切伏（赤、水色）、綿布（白）があてられる。北海道南部の噴火湾岸～胆振地方で製作・使用されたものと考えられる。木綿衣（樺太アイヌ）は、戦後サハリンから移住した樺太アイヌによって製作され、アイヌ文化研究者の更科源蔵が旧蔵していたものと考えられる。この他、マキリ（小刀）や、儀礼具のイクパスイ（捧酒籠）には男性による精巧な彫刻が施される。その他、いくつか制作者、収集者、年代等が分かる資料が含まれている。他には、北に隣接する先住民族（ツングース系のウイльтаやナナイ）の資料も購入した。



木綿衣（北海道アイヌ）



木綿衣（樺太アイヌ）



イクパスイ（捧酒籠）



マキリ（小刀）

## 【アイヌ文化関係文書資料】

### 2. 古地図 計3点

区分：未指定

時代：17～20世紀

アイヌ民族の居住地が、欧米やアジア諸国からどのように認識されてきたかに関しては、海外の古地図が有効な資料となる。アムステルダムの地図業者デ・ウィット（1610-98）による「韃靼及び中国図」（アムステルダム 1657年刊 彩色銅版）には、1643年オランダ東インド会社フリース船長が、サハリン東岸、北海道東部、クナシリ・エトロフ島周辺を航行した際に、これらを大きな陸地と判断して海岸線がつけられる形が描かれている（図中の右上）。

この他、カムチャツカ半島の南に千島列島が連なり、さらに扁平なマツマイ島（北海道）が描かれるニュルンベルクの地図製作者ヨハン・ホーマン（1664-1724）「カスピ海およびカムチャツカ図」（1725年、左半分はカスピ海の地図）や、アイヌ語地名が多く記入された詳細な海図のエヴァンス「北海道図」（1926年）を購入した。



デ・ウィット「韃靼及び中国図」

## 【アイヌ文化関係美術資料】

### 3. アイヌ風俗画、刷り物、人物写真等 計 8 点

区分：未指定

時代：19～20 世紀

近世以降、主に和人によって描かれたアイヌ風俗画は、写真が登場する以前のアイヌの生活文化を視覚的に伝える資料として、民族誌の観点から注目されている。

紙本著色 アイヌ風俗画 六曲屏風一双は、矢筒を肩にかけ、腰にマキリを下げ、弓を番えて狩りをする男性（左）や、舟をこぐ車權を肩に担ぐ男性と、額におぶい紐をかけ幼児を背負う女性（右）のように、アイヌの狩猟、漁撈、祭祀等の 12 場面を人物中心に描いたもの。用途や状況に即し、着衣や民具を多様に描き分けている点が興味深い。

「應需図蝦人東奥松前 鳳蘭筆」の落款があり、文政 7（1824）年に松前藩に仕官した桑名藩士奥平貞守の息子、松前藩士奥平貞貫の作と考えられ、当時から蝦夷に対する関心や需要が高かったことが推察できる。

この他、場面説明に英文が書き添えられたアイヌ風俗画「蝦夷島奇観」（明治末、木村巴江の写しか）や、明治から昭和初期にかけての芸能興行チラシ、人物の写真等を購入した。

